五月興行

文楽座人形淨瑠璃

文楽座

よるの部

一部金十五錢

しばつ四

御挨拶

青葉輝くはつなつ五月、皆々様には、いよいよ、御機嫌よろしきことゝ存じ上げます。

事新らしく、申す迄もなく、皆々様は御熟知のことゝ存じ上げますが、吾國に數ある鄉土藝術の中、最、藝術化した文樂座、淨瑠璃人形芝居こそ、粹中の粹として、興行毎に、皆々様から、御絶讃を頂き居りますが、「文樂を保護せよ」との聲は、朝野に喧しく、今や「文樂協會」も設立される運びとなりました。當皐月興行も引き續き、晝夜二部制興行と致しまして目新らしき名狂言を、夜の部は、津太夫、綱造、土佐太夫、吉兵衛、太隅太夫（道八）人形には、榮三、文五郎、他若手花形、揃へて、華々しく、御尊覽に供する事に致しました。はつ夏五月を迎へて、三味一体の、此藝術をお味ひ下さいませ。

昭和八年五月一日初日

夜の部午後六時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席　御一名——金二圓五十錢
二等席　御一名——金一圓
三等席　御一名——金五十錢

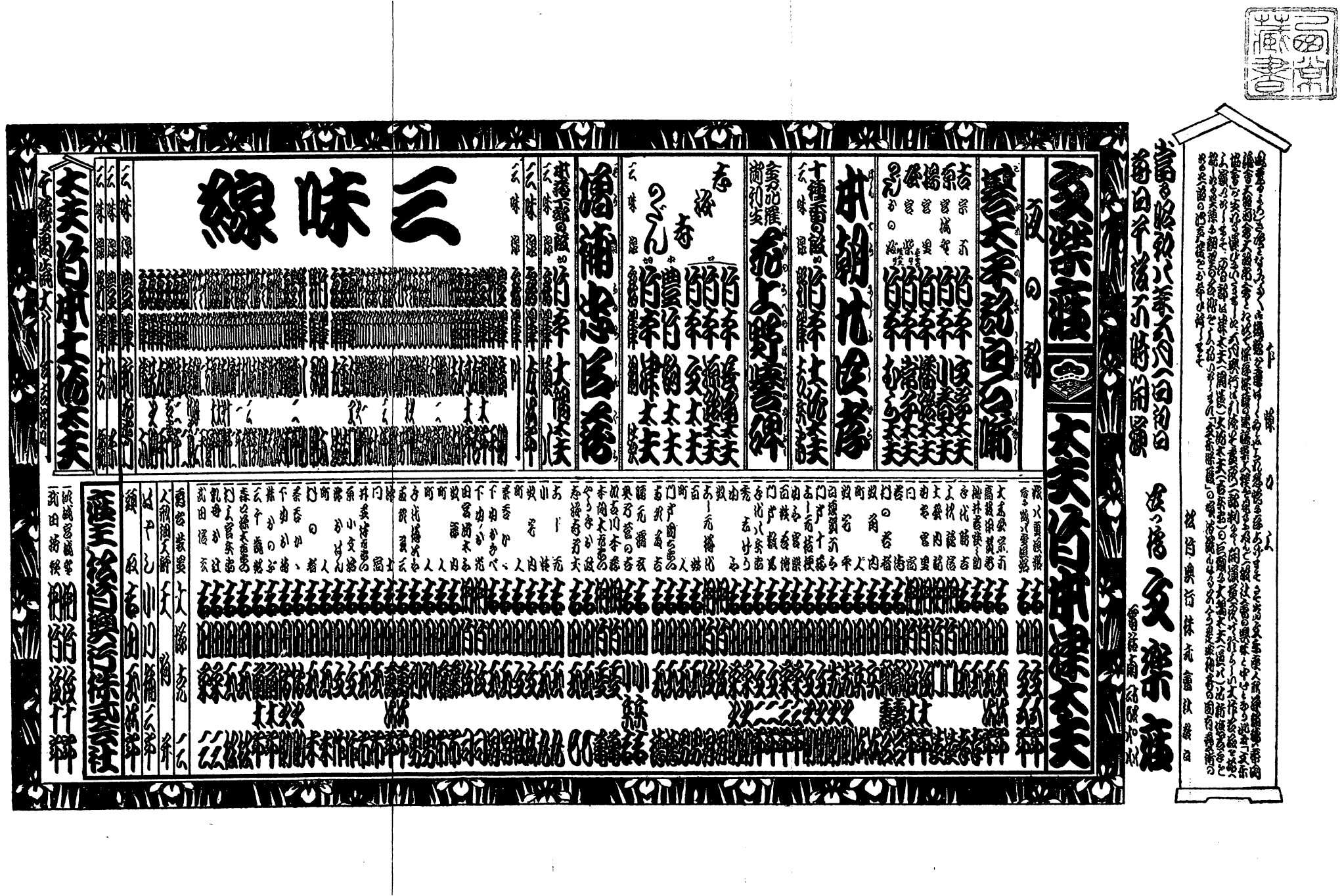
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符
專用電話　南四七一一番
電話南　七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷
永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目
長三八〇三番
四九四四番
四九四一番
（44）土佐堀


文楽座
太夫百世
三味線
文楽

風薫る五月への躍進

文樂座人形淨瑠璃

五月興行　晝夜二部制

夜の部豫定時間表

碁太平記白石噺

吉原揚屋の段（午後六時より六時五十分まで）

幕間　十分間

本朝廿四孝

十種香より狐火（七時より八時五分まで）

幕間　十分間

金比羅御利生　花上野譽碑

志渡寺の段（八時十五分より九時四十分まで）

幕間　十分間

增補忠臣藏

本藏下邸の段

（九時五十五分より十時四十五分まで）

（舞臺裝置　大塚克三）

吉原揚屋の段

宗　六　竹本文字太夫
宮城野　竹本小春太夫
宮　里　竹本播路太夫
文字榮太夫改メ
宮　柴　竹本常子太夫
綾太夫改メ
おのぶ　竹本むら太夫
野澤勝　平

第一

碁太平記白石噺

新吉原揚屋の段

この淨瑠璃は安永九年正月江戸外記座に上場されたもので作者は烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛の三人合作。その内容を申し上げますと、奥州逆井村の百姓與茂作の姉妹も貧苦のために江戸新吉原で遊女となり全盛を謳はれてゐると、郷里から妹の信夫が姉を尋ねて來て偶然の機會から姉妹が邂逅します、姉の宮城野は妹の口から父の横死を知つて敵討ちを決心しましたが揚屋の亭主宗六から曾我物語を例にして却て懇ろに意見されるといふ筋で御座ゐます。この實説は松平陸奥守（仙臺侯）の家老片倉小十郎の劍術の師範に田邊志摩といふ者があつて享保三年中白石在で領内足立村の百姓四郎左衛門のために行列を破られたので四郎左衛門を無禮討にしたがこの時四郎左衛門に娘があつて深くこの事を無念に思ひ陸奥守の劍術師範瀧本傳八郎の許に傳手を求めて姉妹共に奉公し六年間劍道を修業し瀧本の助太刀で享保八年仙臺白鳥明神の境内で首尾よく敵志摩を討ち取つたといはれてゐます。

新吉原の段

入相の、鐃さへ早く暮れ果て、廓の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、簞笥長持鏡臺の埃取迄綾

人形

傾城宮城野　桐竹紋十郎
女郎宮里　桐竹紋太郎
女郎宮柴　吉田榮三郎
妹おのぶ　吉田扇太郎
禿しげり　吉田榮之助
やり手お政　吉田玉七
大黒屋宗六　吉田玉次郎

錦、福さなりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て。詞太夫様御機嫌わへ、ホンニさつきに貸本屋に參じて、先度の曾我物語の次じやといふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴様、今日のお客は仲の町の蔦屋から、ゞからんだ二人一座、宮城野様はもとよりお前も早ふ身仕廻して。オヽせわしな、今身仕廻をするはいな、併し差合な顔はないかへ。イヽエどれも〳〵侍衆、一人のお方は器量よし今一人は髯むつちや、目の大きい熊か人かといふ様な。どちらへ札が落うやら、いやな事ではないかいなと何國の浦も客噂、そしるも廓のならはしかや。詞アヽコレ、そんな事いふて遣手衆が呵ろぞへ。オヽ呵つたて、あたおかしい、イヤおかしい次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱へて戻らしやんした奉公人、おかしい物いひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋れて上つたとの話し、宮城野様の慰みに、連てきてお目にかけう、お前もお出と連立つて行く後かげ見送って。詞テモ扨も、わざ〳〵獨り物いふて、マアよい氣ではある程にの。コレ〳〵しげり、れなた其處らかたづけやと、いひ付る間もありやなし、新造二人が伴ひに、いやがる者をむり無体、突出されたる田舍の娘、儚きよるきよろつひに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興さめ顔に。詞オヤ〳〵〳〵女郎さあ達、人が寢そべつて居る處を、用さア有來とらへと、二階さあぶち上て

こりやマア何たる所だ。どこもかも光り申て、おしやくの櫛さあ見る樣に、塗こべえた簞笥さア、其上に夜の物も金布たもじやア、蒲團も蘇放染の色のよさ、私らアれまつたら、あくとの胼さア引かゝつてうつ切べい、おやつかなたまげ申す〳〵、と言ければ、打轉る程おかしさかくし。詞コレそこなお子、お前の故郷國所、爰へどうしてお出た譯、咄して聞かさんしよば、お力さもならうにと、なぶると知らずしく〳〵泣。詞オヽやさしな詞おいやり申す、私ら國さア奥州、だゞアやがアまに樣子有つて別れ申して、お江戸さあはあらく盛る處だアと聞き、其うへ姉さア此吉原の名高い女郎さアに成つて居さるとのはなし、女わらじの身として敵ない思ひをして、尋れてくるも、海山物語りの有事、聞いて哀れを添てたべ。詞オヽモ何を言ふじやゝら、すつきりと譯が知れぬ、そして吉原で名高い女中を姉樣とは、雲つかむやうな尋れ物。サアそれだから頼み申すは。昨日觀音さアで目眼のおつかない人が、連て行つて逢はしてやらうと、籠さアに乘せてくる所を、是の御亭の世話さアに成り申して夕から居申す、脚かけ申すも他生の緣、ほんで御座るわよ、赤はらばたれ申さぬぢやア。ホヽヽ聞けばきくほどおかしい咄。そして今の赤はらとは、あられもないと若い同士、糠もくづるゝ高笑ひ。知る人ぞしる宮城野が、押しづめて申しお二人、浪花の葦も伊勢の濱荻、所々でかはる物言、其樣に笑はぬ物。詞今あの子の言つてじや有つた、だゞアやがアまといふはな、爰で言ふとゝ樣かゝ樣、又赤はらといふてじやは嘘はつかぬといふ事じやわいな、扨つてもがをれよふ御存じ。オヽ知つたもむりか憂臥は、夜毎日毎にかはる枕、心つくしの果は愚か、奥のとろくのお客にも、馴親しんだ身の一德。詞オヽ其のお客で思ひ出した、奥のお客がやかましかろ、私も追付けそこへ行く、先へお出てよい樣にコレ〳〵しげり、仲の町の井筒屋へ行ての、昨日の返事聞いておじや、早う〳〵と云ふ下から、遣手の政が例のしやぎり。詞奥のお客のお侍かれ、何咄して居さんすぞいのう。オヽせはし、そんならわしらも奥へ行

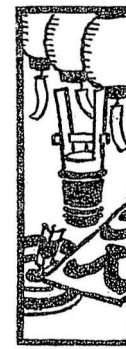
て、御客選らみのえようもいはず、寢そべる度にアヽ何やら、オヽそれ赤はらたれて氣に入つて、日がら賴もと口々に、いふて座敷へ行くふりを、見やる宮城野しのぶが傍。もしやそれそと摺よつて。詞さつきにからの咄しを聞けば、姉を尋れる人さうな、奥州はどこらの生れ、何といふ所じやへ。詞アイ奥州は白坂近在逆井村といふ所。フン其逆井村といふ所に、與茂作といふお人が有らふがの。アイサ、其與茂作といふのはめらしがだヽ。あそんならわしが妹と、縋り寄るを突退けて詞イヤ〳〵〳〵、がアまの常に云はしやるには姉さアの方にもしるしが有る、それを證據に名乘合ひ、委細心底打明ろと、云しめた、それが有るなら早うつん出し、見せてくんされ姉さアとなつかしながら油斷なき。オヽ悧巧な人、疑やるも尤もと、立て簞笥の袋棚、襖開けばうや〳〵しう、淺草寺の觀世音、扉表具におしならべ、かざり置いたる筒守り、見るに妹も疾く遲し、首にかけまく壷井の守。詞コレ〳〵〳〵、此姉が國を出る時かヽ樣が大事にせいと下さんした、此守とヽ樣は楠家の御涙人故、河内の國壷井八幡樣のお守、それを持つて居やるからは、妹じや〳〵、コレ〳〵、よう顔見せてたもいのう。オヽ姉さアでござるかいの、逢ひたかつたと諸共に、嬉しなつかし縋り寄り、外に詞は泣く計り。斯ぞといざや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎさに、來かヽる亭主宗六が、樣子有りげな部屋の體、忍んで事を立聞くとも知らず姉妹ひそひそ話し。詞オヽ妹、よう尋れて來てたもつた、年端も行かぬそなた、とヽ樣成り、かヽ樣なりと、いづれぞ付いてお出であらう、もし道中ではぐれてかと問はれてわつと聲を上げ。詞アヽコレ〳〵〳〵、斯うめぐり逢ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては濟まぬ、サアどうぞと、尋ぬる姉の心もそゞろ。詞エヽ遠國隔つた姉さアそれで何にも聞かないナ、だヽア五月田植の時分、代官志賀蟹七といふ惡侍に。ヤアヤア〳〵何といやる打切れてお死にやり申した。ヤアと惚り差込む癪。詞とつとモウ惡い時そしてどうじや其跡は、サアおらだけもすでの事殺さるゝ所、庄屋の伯

父が駈つて來て、りきんでみても肝心の、證據たければだゝアは犬死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならずすごら〳〵、そんだの言號の御亭にも對面はしたれども、是も此江戸さあへ歸り申す、跡はおらだけとがアまとばかり。賴ない身に下地の大病ヤアお煩ひでもあつたかいの、シテ御本復なさつたか。イエ〳〵六月十六日に悲しや終にお死にやり申したヤア〳〵御養生も叶はなんだか。ハア、話しさあ聞いてさへ、そない歎かつしやる物、じきに見さらへたおらだけが心、エーコレ、泣かつしやるは道理だければ、賴に思ふ姉さアヌ病氣おこしでは猫か濟ない。イヤ〳〵、イヤ〳〵、中々煩ふ樣な事じやない、そしてどうじや〳〵。サアなじよにもかじよにもおらだけ一人庄屋の伯父さまが引取つて、奉公しろと云ひめすけど、何の奉公所かい口惜いとくやしいで、跡先思はず且那寺へかけこんで、詞坂東順禮するといふて、笈摺もらひ國元を、つゝ走つたもそなたに尋れ遇たら、姉妹心一致に仕申して、だゝアの敵が討ちたいばかり、道中すがらの艱難もそなたにあはふが樂しみに、詞かいに苦勞とは思はなんだ、併し逢ふたらかつばりと、しよつ骨が拔けた樣な、コレそない歎かつしやる手間で妹はるゝ尋れて、よう來てくれためこがめらしといふてくんさい姉さアと、あやも泣き入る稚氣に、長の旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野に、つゞくはすゑの松山を、袖に涙越す涙なり。歎きの中も姉は猶、妹が脊を撫おろし。詞ナ〳〵其樣に思やるす尤も、併しそなたは父母に、長う添やつた身の果報、此姉を見やいのう、年貢にせまつて、さゝ樣は、水牢、其苦を助けうばつかりに、コレ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年、そなたは五ツ子顏さへ見知らず、さゝ樣の御最期や母樣の死目にも、逢はぬといふ悲しい不孝なはかない事があらうかいの、斯うした事とは露しらず、此妹は健なか知らぬ、さゝ樣かゝ樣お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらふ物、便のないを杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させまして、どうしてさ、色や浮氣を窘んで、勤め大事と言號の、殿御の事

も、そなたの事も、戀しなつかし思ふのを、たのしみ暮したかひもなう名乘逢ふたは嬉しいが、悲しいはなし聞く姉が、心も推してたもいのと手を取交はす姉妹が、涙々を立聞くも貰ひ泣して立わけの、暇簾もぬるゝばかりなり。つもる話は富士の山かず〳〵多き涙の隙。詞こんな事聞ふはしか、借て讀んだる曾我物語、兄弟の人々も、終には父御の敵討、コリヤ泣いてゐる所じやないわいのア、是肝心の事を忘れてゐた、此姉の言號の夫、此江戸にゐやしやんすとの話し、其お方の名所、定めて覺えてゐやらうのう、そりやせはしさに、何も聞かない。オヽモそれを知らぬといふ事があるものかいの、そふいふ事なら敵の顔も。それ知らないでよい物か。目眼のでつかな鼻のひらたい男ぶり。モウよい〳〵壁に耳、御浪人こそなされたれ、由緒たゞしい武士の娘。オヽめらし姉妹じやてゝ、おのれやれ敵討いで置かうか、オヽようやつた、出かしやつた、幸ひ奥の大廳ぎ、あれに紛れて此家を立退き、さうじや〳〵と妹が帶しめ直し我身も共に、小褄かいしよげ身ごしらへ、立退かんとする所を、暇簾引切かけ出る亭主。コリヤどこへ。おゝ且那樣のいつの間に。おりや最前から、アいや、たつた今爰へ來た、か、わがみ達は敵、サアかたい約束の男が有る故、こゝをかけ落、コレわるいぞや〳〵、そしてマア其田舍娘を知つて居やるか、アイ、イヽエ。知るまいてい〳〵、昨日淺草でかゝへて戻つたわいのう。且那樣私らが今の咄し。サア聞いたでもなし、聞かぬでも。それ聞かれたら赦さぬと、突出す懐劍、さすがの姉妹、鏡臺の、鏡追取りてう〳〵はつし。詞ヤ何と違ふた物か、違はぬ物はそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移る二人の顔、似たりや似たり、花あやめ杜若、其五月雨のくらき夜に、敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、おれが讀んで聞かそう、光陰おしむべき時、人を待ざることわり、日間行駒つながぬ月日重なりて、一滿は十三歳に成にけり。詞ナ此道理、河津の三郎祐重といふ有名る勇者、大名の息子殿でさへ、五ツや六ツの比よりも、思ひ立たれ親のかたき、なみ

大ていの事でなければ討れぬ者じゃコレマ聞きや、大名の後室共云はれる人が、曾我の太郎祐信殿へ、二度の嫁入せられたも謀、又息子の縮王丸を、いとしなげに坊主にせうと言はれたも、敵工藤祐經に油斷させう爲計り、其年月の憂艱苦、詞無念口惜い事の有るぢやう、是迄、何ぼも芝居の狂言に取組んでして見せる繼爺の祐信殿も大名、役に立ずの貧乏人と、後ゆびをさゝれたも兄弟の子供衆に、實父の敵が討せたい武士の意氣地、こりや是陰德と云ふ大義心、其上鬼王床司左衛門といふて、伊東家の老臣が有つて、幼少な子供衆に、畫は終日劍術稽古、夜もすがら机の上、忠孝の道を敎へ、成人の後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乘らしたも、北條殿といふ烏帽子親が有つたさかい、近いたとへは、おれが樣な不粋むくつけな親方じやと思ふてたもるし、こつちも又抱の奉公人じやと思へば、何事によらず引けを取らしとむないアゝこんな事は言はいでも知れた事じやが、今の樣な咄しを聞けば、おりや見遁したい〳〵、コレ爰をよう聞きや、首尾ようそなたが逃果てからが、悲しい事は遠國生れ、しつかりとした心當もなうて、江戸中をうろつきやるを、內人の者共が見付、何所そこに゛ますといふ事を聞いてアゝ゛ゑいわい打捨て置けとは、親方の身でどうもいはれる、そりやモわがみ達計でもない、此廓へくる奉公人に親孝行か、夫のためでない物は一人もない、あれも孝行じや、これも眞女じやと、それなりけりに仕廻ふては、こつちもおやま商賣取置かねばならぬ、おれに成人の息子でもあつて、抱の新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、ヤイ極道めぼいまくつてのける勘當じやと、强異見する親の身が、人樣の大事の息子殿が見えると、きやつ放錢じやわいの、コレ賴もしさうなお客じや程に、隨分大事にかきやと、智惠を付る、マ此樣な得手勝手な商賣はなけれど、こりや是浮世の身過世過、さういふ身分な此おれでも、慈悲と情といふ事は、不斷心に忘れはせぬ。マちよつといふて見樣なら、此惣六は最前いふた、鬼王庄司左衛門じやと思や。外に烏帽子親の北條殿とい

ふ樣な、後楯でも出來てから、ヤさつきの樣に思ひ込んで、突かゝつた懷劍、おれにさへつい擲き落される樣な事では、まさか敵に出合ふた時すつぽんの間にも合ぬほどに、おれがいふ詞に隨ひ、コレ〳〵此道をも稽古して、鍛錬の熟した上では、ぐつと〳〵と尻持つ合點。コレ欠落の尻もつて行かふとはいふまい、急ぐ所ではない程に、大事の勤め、欠落しようとは無分別、お客大事に勤めてたも、合點がいたかと、つど〳〵に、曾我物語の引くゝり、讀切講釋一方を、賴もしげある亭主なり。二人は飛立つ忝涙、身にも胸にもあり餘。エゝありがたう御座んすと、姉が拜めば妹も、只伏拜む許りなり。詞カゝ嬉しいのは尤も、義を見てぜざるは勇なし、わがみ達の樣な奉公人見立て、召かゝへたいや、仰山なが、おれが目鏡もおよそ違はぬ、禮いふ事も何にも及ばぬノ。是人の目鏡に悟られぬ樣、隨分共けはひ化粧も美しうして奥の座敷へ、ソレ遣手の政はゐぬか、湯をもつて來てやれいやい、しげりはゐぬかと呼出して、言ひ付るのも賣物に、花も美もある嚮の惣六。生粹の淀まぬ座敷は大騷ぎ、牽頭末社が彈く三味に乘つて呑むやら謳ふやら、現たはひの喜見城、意見上手の親方が、こもる情に宮城野が、妹を部屋に奥座敷引別れてぞ、三重〆入にける。



十種香より狐火

切　竹本　土佐太夫
　　野澤吉兵衛
ツレ（鶴澤清二郎
　　野澤吉左
琴　竹澤團二郎

人形

武田勝頼　桐竹紋十郎
腰元濡衣　吉田小兵吉
娘八重垣姫　吉田文五郎
上杉謙信　桐竹門造
白須賀六郎　吉田光之助
原小文治　吉田文作

第二　本朝廿四孝

十種香の段
狐火の段

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齋藤道三の謀叛を取合せたる作にて『信州川中島合戰』『三軍桔梗ヶ原』等を籠本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で初演は明和三年正月興行の竹本座で、十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを申ますと、上杉武田兩家和睦の爲として義晴の後室手弱女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁とさせます。大切には道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出度夫婦になるのですが十種香の場の勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの蓑作であつたのです。仍ち其處に取替子の面白さが湧いて來るのです。濡衣は蓑作と通じてゐましたが濡衣は齋藤道三の娘であります道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍びいつてゐたものです。狐火の氷渡りの事は支那西湖の故事であるのを諏訪湖へ持て來たものであります。

（床本）

十種香の段より狐火まで

行水の流と人の蓑作が、姿見かはす長上下、悠々として一間を立出で、我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りとなつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちや

あらんかと、餘所ながら守護する某それかしそれと悟つてか〳〵しや、ハテ合點の行かぬとさしうつむき、思案にふさがる一ト間には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より。一ト間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の弔ひの、位牌に向ひ手を合せ、廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、弔ふ人も情なや父御の惡事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいとしい、嘸や未來は迷ふてござらう、女房の濡衣が、心ばかりの此手向、千部萬部のお經ぞと、思うて成佛して下さんせ、南無阿彌陀佛〳〵〳〵。誠に今日は霜月廿日、我身替りは相果し勝頼が命日、暮行く月日も一年餘り南無、幽靈出離生死頓生菩提、申し勝頼樣、親と親との許嫁、在りし樣子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添ふ臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、烟も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましびかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛とたつと一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕ごがれ見え給ふ、あの泣き聲は八重垣姫よな、我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣、不愍ともいぢらしとも、云はん方なき二人が心と、そゞろ涙にくれけるが、アヽ我ながら不覺の涙と、襟かき合せ立上る、後にしよんぼり濡衣が申し、蓑作樣、合點のゆかぬはあなたのお姿、どうした事で此やうに。ガヽ不審尤、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小。テモ扨も、衣紋付きなら上下の召樣まで、似たとはおろか矢張其まゝ、かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんと、讀みしば別れを悲しむ歌、かたみさへぢやに我夫に、みぢん變らぬ此お姿、見るにつけても忘られぬ、私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてと伏沈む、泣聲もれて一間には、不審立聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見紛ふ方もなく、ヤア我夫か勝頼

樣と思はず一ト間を走り出で、縋り付いて泣給へば、はつと思へどさあらぬ風情、こは思ひ寄ざる御仰せ我等蓑作と申す花作、漸々只今召しかゝへられ、衣服大小改めし新參者勝頼とは覺えなし、御麁相あるなと突放せば、ムゝ何と云やる、今父上にかゝへられし新參者、花作の蓑作とや、自とした事が、餘りよう似た面ざしの、もしやそれかと心の煩惱二人の手前恥しながらコレ濡衣、此蓑作とやら云ふ人を、そなたは疾うから近付きか。エイ。いやいの、知る人であらうがの。アノお姫樣とした事がたつた今見えたお人、なんのまあ私が。イヤ隱しやんな今の素振、忍ぶ戀路といふやうな、可愛らしい仲かいのと、思ひもよらぬ詞に惚り、オゝお姫樣の仰有る事わいの人にこそよれ、なんのあなたに勿体ないと云やるからは、どうでもそなたのしるべの人かイヽエ、さうではなけれ共、大事のお主の目をかすめ忍び男を拵へるは勿體ないと申す事で御在ります。ムゝすりやしろべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自を、可愛がつてたもる樣押付ながら媒を、頼むは濡衣さま〳〵と夕日まばゆく顔に袖、あでやかなりし其風情、オゝお姫樣とした事がまだお子達と思ひの外、大それたあの蓑作殿を。サア見染めたが戀路の始め、後とも云はず今爰で媒せいと仰有るのか。我折た、ほんに大名のお娘御とて、油斷ばならぬ戀のみち、品によつたらお取持ちいたしませうか。コレ〳〵濡衣、必らず麁相云ふまいぞ。サア何もかも私が呑込んで、ナ、呑込んでお取持すまい物でもないが、眞實底から蓑作殿に御執心でござりますか、と問はれて猶もあからむ顔、勤する身はいざしらず、姫御前のあられもない殿御に惚れたと云ふ事が、嘘、偽に云はれうか、其お詞に違ひなくば何ぞ慥な誓紙の證據、それ見た上でお媒、オゝそれこそ心易い事、其の誓紙さへ書いたらば。イヱ〳〵夫もこつちに望もある、私が望む誓紙と云ふは諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる、諏訪法性の御兜を、盗み出せと云やるのは、扨てはあなたが勝頼樣と云ふ口押へて、ハテ滅相な勝頼呼ばはり

みぢん覺のない蓑作、麁忽ばしのたまふなと、云ふ顏つれ〳〵打守り。許嫁計りにて桃交さぬ妹脊中、おつゝみあるは無理ならねど、同じ羽色の鳥つばさ、人目にそれと分られど親と呼び又つま鳥と呼ぶは生あるならひぞや、いかにお顏が似ればとて戀しと思ふ勝頼様、そも見紛うてあられうか。世にも人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連添ふ私に何遠慮ついかう〳〵と御身の上明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事ならば、いつそ殺して〳〵と、縋り付いたる恨み泣き。父謙信の聲として、蓑作は何れに居る、搥尻への返答、時刻移ると立出れば、はつと蓑作飛しさり御支度よくば直様參上、ホヽ委細の事は此の文箱に、片事も早く罷越せはつと、領掌文箱携へ、搥尻さして急ぎ行く、謙信後を見送つてヤア〳〵者共、用意よくば早來れと仰せにはつと白須賀六郎、原小文治更科なんどの譜代の郎黨、御前にすゝめば謙信勇んで今此諏訪の湖に氷閉れば渡海は叶はず、搥尻迄は陸路の切所油斷して不覺を取るな、ハア畏り奉ると、勇み進んでかけりゆく。後に不審は八重垣姫、申し父上、こと〳〵しい今の有様、何事やらんと尋ねば、ホヽあれこそは、武田勝頼討手の人數、何に勝頼様を討手とは、コハそもいかに何故と驚く二人をはつたと睨め付諏訪法性の兜を盜み出さんうぬらが巧み、物かげにて聞いたる故、勝頼に使者を云付け、歸りを待つて討取さんと、牒合はせる討手の手配エイそんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲かハアはつとばかりにごうと伏し今日は如何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我夫に再び逢ふは憂盛華と、悅んで居たものを又も別れになる事は何の、因果ぞ情けなや父のお慈悲にお命を、どうぞ助けて給はれと、口説き歎くに目もやらず、ヤア武田方の廻し者、憎き女と濡衣引たてうぬに尋れる仔細あり、奥へ失せうと小腕とり、情用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ。思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、アレアノ奥の間で檢校が、謳ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼様、かゝる巧みのあるぞとも、

知らずはからぬ御身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても、歎いても、聞入れもなき胴慾人、娘不憫と思はすならお、命助けて添はせてたべと、身を打伏して歎きしが、イヤ〳〵泣いてゐられぬ所、追手の者より先へ廻り勝頼樣に此事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖船人に渡り頼まん急がんと、小褄取手も甲斐〳〵しく、かけ出せしが、イヤ〳〵〳〵、今湖に氷張詰め、船の往來も叶はぬよし、歩路をいては女の足、なんと追手に追つかれう知らすにも知らされず、みす〳〵夫を見殺しにするは、いかなる身の因果、アゝ翅がほしい、羽がほしい、とんで行きたい知らせたい、逢ひたい見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはよもなるまじ、此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ此御兜は諏訪大明神より武田家へ、授け給はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、勝頼樣の今の御難儀、助け給へすくひ給へと、兜を取て押頂き、押頂きし佛の、もしやは人の咎んと窺ひ下りる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつと驚き飛退しが、今のは慥に狐の姿、此泉水に寫りしは、ハテめんようなとごきつく胸を撫でおろし〳〵こは〳〵ながらそろ〳〵と、さしのぞく池水に寫るは己が影ばかり、たつた今此水に、寫つた影は狐の姿今又見れば我が佛、幻と云ふ物か但し迷ひの空目とやらかハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつと手に捧げ覗けば又も白狐の形、水にあり〳〵有明月、不思議に胸もにごり江の池の汀にすつくりと、詠め入つて立ちたりしが、誠や當國諏訪明神は、狐を手もつてつかはしめと聞つるが、明神の神体に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑ひなし、オゝそれよ思ひ出したり、湖に氷張詰むれば、渡り初する神の狐其足跡を知邊にて、心安う行きこう人塲、狐渡らぬ其先に渡れば、水に溺るゝは、人も知つたる諏訪の湖たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼樣に返

へせとある、諏訪明神の御教へ、ハアゝ忝や難有やと、兜を取つて頭にかつげば、忽ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち、かしこにも亂るゝ姿は法性の兜を守護する不思議の有樣、諏訪の湖、かち渡り甲斐と越後の兩將と其名も今に殘るらん。

志渡寺の段

口		
竹澤源路太郎	竹本長尾太夫	
鶴澤友若太夫	竹澤歌助	
鶴澤寛太市	竹本豊太夫	
中		
竹澤團太夫	竹澤駒太夫	
切		
竹澤綱太造	竹本津太夫	

第三

金比羅御利生 花上野譽碑

志渡寺の段

この淨瑠璃は天明八年八月江戸肥前座上場芝芝叟、筒井半平の合作で全七段物志渡寺は四段目である、讃岐丸龜の城主は箱根温泉に湯治に赴き品川の遊女其朝野風を招んで遊び足輕民谷源八の忠義に愛で、深く契つた其朝を身請して添はせてやる丸龜家の指南番森口源太左衛門は鎌倉の武將より武藝の達人を抱えるとの申込に就て同僚は民谷源八を邪魔者にして之を暗討にしあまつさへ奸臣岩代傳内と謀つてお家の重寶を盜む民谷の遺子坊太郎は同家中槌谷内記の情で丸龜家の菩提所志渡寺の方丈に預けられ敵に油斷させるため啞唖となつて育てられたが忠義な乳母お汪はそれを悲しみ火絕ち五穀絕ちして金比羅大權現に祈願をこめ三七日滿願の日には一命を捧げても坊太郎の病氣本復を祈らんと自害する、その日志渡寺では君命によつて森口と槌谷内記との試合が行はれたが槌谷はわざと毒酒を飲んだと見せて森口に勝を讓つて仇討の計略をこらす、坊太郎は乳母の祈願で金比羅權現の奇瑞現はれ武藝上達し森口源太左衛門を討て首尾よく仇討本懐を遂げるといふ。

（床本）志渡寺の段（口）

戀する海士が家迄も一目に近き志渡寺は志渡の浦浪名に高き一藝に秀し

人形

森口源太左衛門　吉田玉松
乳母お辻　吉田榮三
土屋内記　桐竹門造
奥方菅谷　吉田小兵吉
方丈　吉田玉七
坊太郎　桐竹紋司
門弟園右衛門　吉田玉德
門弟十藏　吉田文之助
門弟數馬　吉田文二郎
弟子僧　吉田萬二郎
弟子僧　吉田藤市

心荒鷹の眼尖き森口源太左衛門門弟數多引連て方丈近く入來り何と何れも此頃鎌倉の武將より武術の達人下せよと此頃度々の御催促それに付き源八が緣者たる槌谷内記と今日の立合は則殿よりの仰渡され又もや工夫を廻らし内記めに不覺を取らすこんたんも有りそふな物、兼ての言合せ十藏數馬は内記が門人某が流義をしたひ弟子に致しくれよと官藏を以ての賴み彌相違ござらぬかと尋に數馬進み出内記を破門し森口殿を師匠と仰く我々が潔白、内記を則ち憶病者に仕立る仕樣はくじりの妙藥酒に浸して與ふる工夫を聞て官藏小聲になりシテ其酒内記めに呑す術がござるかなチ〜サそれにこそ究竟は例年の格式靡利支天へ備へある神酒へ調合只一口に呑は忽ちコリヤ何角と奥で何れも來やれと先に立つ强惡不敵の森口に隨ふ牛連まだら武士打連てこそ入にける、花は三芳野殘る名を惜むは武士の本意ぞと忠義を胸に槌谷内記しづ〳〵と打連ればそれと案内に出向ふ方丈互に禮儀事終り先以て今日は天氣快晴例年の儀とは申ながらお心遣ひ察し申ヤ是は〳〵御挨拶森口殿にも只今御入來殿の御意とは申ながら今日の立合御苦勞に存すると挨拶あればされば〳〵是に付いても惜むべきは民谷源八思ひがけなき不慮の最期一人の悴迄御遊放に預かる中、思ひも寄らぬ啞の業病、槌谷村に居る乳母お辻艱難辛苦を思ひやればアー不便な事に存ずるとうるむ目の内方丈も供に涙顏催さる、

奥より出る菅の谷が襠姿しとやかに神酒の三方うや〳〵しく夫の前に直し置く森口様には神前に置て神酒頂戴相濟上あなたへ持参致せよとのお差圖なる程例年の式禮イザ頂戴致さんときり手水手に取上る土器へ何心なく女房が銚子の口よりつぎかゝる酒に秘藥のあるぞとは神ならぬ身は白紙の障子一重に窺ふ森口ぐつとほしたる槌谷が顔色常に替つて五体の振ひ仕濟したりと立きる音、驚く女房不思議の方丈内記殿いかゞ召された何となされたコレ申御持病でもおこりしかと尋れる内に心をしづめハテ心得ぬ今呑だ銚子の酒咽を通れば五體にしみ心苦しき此有様もし毒エ、アゝイ、ヤ定めて毒虫でも入つらん　は奥の一間成程〳〵大會に程もなし客殿へ同道致さんいざこなたへと立出る衣の袖や上下の折目正しき襠もさざけぬ心取々に客殿さして入にける。

（床本）志渡寺の段（中）

時に不思議や晴々たる空も俄にかきくもり槍を扱らす風の音もの凄しき折からに墓所の方より同宿共坊主あたまに鉢巻しめ手に寄り棒引さげさけもかよはき賤の女の矜髪掴み引摺出、ヤイこゝな狼藉者むさい穢ない形をして見れば珠數を樒を持ち墓所〳〵をきよろ付あるくうさんくさい女、清めに清めた靈場を穢した證據は今の大風アゝこいつはアノさはりの女に違ひはないヲ、そふじや〳〵卯塔場から起た風故來て見た所が怪しい女靈驗あらたな觀世音わいらが罪はかまはれどごふやらおいらがなまぐさ物を隠し喰をする様にお師匠様に思はれては坊主の行が濟ぬ故引摺ていて言譯する、サア〳〵うせいと引立る、お待なされて下さいませ姿は賤ない者なれど穢れ不淨の身でもなし志の日に當し故墓參りは致したれども此姿で方丈様にお目にかゝるもおもてぶせお聞分なされて此場はどふぞお歸しなされて下されませコレお願み申上ますと言ふ尻聲も力なく弱り果たる息づかい様子知れば同宿共ハアーコリヤおかしいわい佛の爲とぬかすがコリヤヤイおいらが寺には我がよふな乞食の旦方はないぞよ偽りかたる盗人め構はずと引立いと情け用捨もあら〳〵しく手取足

取立騷くかくと見るより坊太郎走り寄りて同宿を突け退〳〵お辻をかこい涙ながらに手を合せ拜み廻るを見て取雲竹ハアヽ念西見や坊太郎がませるは〳〵人を助る出家の役と聞はつゝて拜むのは其女を助てくれと言事かハヽならぬ〳〵うむを言はせずノウ念西サア〳〵うせいと立寄かゝればアイヤ先づ暫く〳〵と聲をかけ奥より出る槌谷が妻アヽコレ其女こそそれなる坊太郎が乳母なれば方丈様のお傍へ連れ行言譯さすにも及ばぬ事お前方は部屋へ往て休足なされと和らかに丸い捌きに同宿共ぶつくさつふやき連走行、傍り見まはし菅の谷はお辻が傍へ歩み寄り別れて程へし乳母お辻此子の事も苦になつたか昔の姿いつしかに流涙の身とは言ひながらはゝにも増さる養育の此子はお寺そなたは又鹽野村の佗住居に衰へ果て顔の痩ちつと心に張持て此坊太郎を成人させ父の敵サ〳〵を打そふと思ふ心はないかいのふ、日頃に似合はぬ不甲斐なきと意見半分麁略なき實氣を聞て手を合せエヽ有難い今のお詞敵は誰共知られどもお主も聞へる民谷の何某相手も仕留ずやみ〳〵と御最後有しは是正にだまし打に極しと思へば無念エヽ口惜さ何卒の修羅妄執を晴さんものと思へども和子様はアレアノ病ひ弓矢神にも佛にも見放されたるものなるかと悲しさ餘て病ひと成り此程は喰事もたへ米一粒粟一粒咽を通さぬ力なさ湯水の通ひばかりにて漸々と菓子物に命をつなぎ惜からぬ月日を送るも大切な和子の病ひも直したさ則ちけふは御主人の御命日心ばかりの墓まゐり手向けの水も涙にて過越方の憂思ひお主は非業の及にかゝりたつた一人の思ひ子は生れも付かぬ啞ごろの病ひに沈む此乳母が悲しさはいかばかり思ひまはせばまはす程世界の因果も身一つに報ふて來たか淺ましやと人目も恥すないじやくり、菅の谷も憂涙物得言はれど坊太郎足摺したるいぢらしさ三人顔を見合せて一度にわつと泣涙名に逢志渡の浦風に磯涙よせる如くなり、菅の谷漸涙をはらい悔んで返らぬ世の盛衰方丈様にも御目見への上そなたの病養生は内記様にも相談せんコレ坊太郎そなたの部屋へ合點がサ早ふ〳〵に打默き手を取る稚子嬉しげに養ひ和子を

杖柱立よれどもよろ〳〵と風にもまるゝ笹がにの弱るお辻を抱かゝへ力泣々入にけり。

（床本）志濃寺の段（切）

泣き〳〵立て行く後見送て菅の谷は暫ししほれ居たりしが身腹わけれど育つれば夫程に迄かゝる所へ奥座敷から、息もすた〳〵腰女信夫、御注進と手をつけば。詞ムゝあはたゞしき御注進とは。森口殿との立ち合、夫の勝をしらせの爲か。サア奥様の仰の通り。意地悪の森口殿。定めて負と思ひの外。ヤアさいふより旦那様餓にがた〳〵ふるいむ來て。竹刀持つ手も定らず。二打三打其後はしどろになつて森口殿。勝に極り鼻高々ほんにくやしう存じまする。と聞くより菅の谷口惜涙。物をも云ず一間の忍かけ込む向ふへ。源太左衛門。ばつさためらう其内につゞいて内記弟子方丈各々座席定まれば。團右衛門進出で。詞扨々先生きついお手際音に聞へし内記殿。定めし手剛い立合と思ひの外猫に追はれた鼠同然。イヤ驚き入りまして御座るテヘ〳〵コレハどふした御挨拶。尤も殿へ御師範申す身共なれども。内記殿も聞ゆる達人畢竟時の張合と申すもの。スリヤ何内記殿互ひの勝負は時の運團右衛門殿只今の麁相眞平御免下されて。必共にお心にさへられな。と面にかざる仁義の詞。針を含みし内心と察し乍も慇懃に。詞コレハ〳〵痛み入つたる御挨拶。武藝未熟の此内記。中々貴殿のお相手とは。存じも寄らぬ事なから主命是非なく今日の仕合。イヤモ面目次第も御座りませぬ。と互に卑下はありながら善と悪とは見て取る方丈。詞イヤ〳〵勝も負るも時の運。差出がましき事なから。只今迄の如く水魚の因み。夫が即ち殿への忠義。意恨殘らぬ印の盃。ナニコリヤ坊太郎。申し付たる銚子盃急いで是への聲の下急いで用意の三方長柄。持て出たる小坊主のおとなしやかに控ゆれば。源太左衛門じろりと見て。此の小兒こそ噂に聞く。民谷源八が伜と見ゆる。幸の酌人。コリヤ小僧共是へ來つて酌いたせ。イザ内記殿。お始めなされ。イヤ先に其許より。ハテ扨申さば古參の其許。平に先貴殿から。左様御座らばたつて申すも却つ

て無禮。何れも御免下されい。と取上る盃へ。酌する行儀しとやかに又押下つて畏る。内記は盃改めて詞然らば何森口殿。慮外申す。と互の禮儀。盃取つて森口がさし出せ共。きよろりくわん。詞コリヤヤイつがぬか〳〵。マア酌せぬか。と云へ共唖の返答なく。虫がしらすか心に。イヤとかぶりをふるばかり。源太左衛門。目に角たて。詞ヤア憎い小伜。内記殿へは酌しながら。我に恥辱を與ふる。是へうせふ。と立かゝるを方丈暫しと押止め。詞御立腹さる事ながら。辨へなき小兒の不作法。それと申すも貴殿の威勢おぢ恐れ子供にもこわいと見へます。お酌は餘人に申付るで御座りませふ。アイヤ方丈。そふでござらぬ。三つ子の魂百迄と。只今折檻加へれば重れてかゝる無禮。以後のみせしめ覺へよ。と首筋取つて引ずゆる坊太郎の袂から桃はこぼれて二ツ三ツ。夫は と立寄る内記が目先ひらりと拔て斬り付る。刄の光に身はがた〳〵。臆病風に顔の色槌谷が妻は口惜涙方丈始め門弟も興のさめたる風情なり。森口思ふつぼ。ムゝハゝハゝゝ今日の立合。かてん行ずと思ひしが内記殿の臆病未練。かてゝ加へて此小伜今秡より落せしは當寺に名高き園の桃殿へ献上のすまざる内。盜み喰ふコナ横道者めが。アゝ其筈でも有らふかい。元が足輕の成上りの民谷が伜。盜人根生ある故に。罰が當つて唖と成たる業さらし。献上の申譯此のまゝには濟ますまいと底に意地持つ詞のはし。菅の谷たまらずつゝと出。詞イヤ森口様いつにない夫の落度。病のわざか。障化かと。案じ重る坊太郎が。折悪ふ取落せしアノ桃は。盜んだのでは御座りますまい。枝が朽ちて二ツ三ツ。落つたを拾ふた物であらふのふ。そふか〳〵。アレ〳〵うなづいておりまするば。モウ了見しておやりなされたがよからう様に存じまする。菅の谷が甥の難儀を云拔る。詞イヤ〳〵〳〵成ませぬ。〳〵常の桃とは違ひ西王母が例へ證を引き。殿へ献上の桃を盜む大悪人。折檻は身共が脚。と坊太郎を椽から下へどふと蹴落す傍若無人。驚く方丈菅の谷があはやと見る内廣庭よりこけつ轉びつゝ乳母お辻。走りよつて坊太郎を抱きかゝへたる涙聲。

詞コレ〳〵〳〵和子大事ない〳〵。乳母の辻が來た程に。心を確かに持つて下されや。こわい事はない〳〵ぞや。マいかに誤りあればとてかよわい此子を滅相な。其まあ高い所から。蹴落すといふ樣な意地の惡い。ホヽ〳〵ホヽヽ惡い〳〵。アイ此子が惡ふござります。塵一本でも人樣の物。盗むといふ樣な事ある物がござりますか。是計りは子供じや迚。アレ天道樣がおゆるしなされぬぞへ。ハイ〳〵〳〵森口樣へ申上ます。私は辻と申て。此子の乳母でござりまする。方丈樣への申譯。きつと折檻のいたらぬ樣もござりますれば。幾重にも御了見。偏に願ひ上げます。と額を土にうづくまる。詞ムヽスリヤ其方は。此小伜が乳母とな。ハイ乳母でござります〳〵。エヽむさくるしい形を仕あがつて。うそ穢いわい。コリヤヤイ。方丈への云譯計りで。殿へ献上の申譯は。何とせふと思ふておるぞ。サア其義は辨へ知らぬ女郎の猿智慧。すつこんでけつからふ。御前への申譯に。今森口が眞二つに打放す。と持つたる刀ふり上ぐれば。方丈其手をしつかと留め。詞イヤお手討にはなりますまい。そりや又何故な。さればでござる。坊太郎に誤りあればいましむるは愚僧が了見。献上の名物なれ共果物に人の命よもや取らふと御意もあるまじ。よしや左樣の義も御座らば。人を助ける出家の役。何處までも坊太郎が命乞を仕る。ムヽシテ又。獻上の申譯。はハテと聞入れなき時は是非に及ばぬ傘一本。餘人のお世話は頼申さぬ。貴殿も力を納め御歸宅あつて御休息。然るべう存ると出家氣質に云ひまくられ。さすがの森口あんごりと。刀を鞘に納めた顏。詞ハテ扨。命冥加な仕合者。方丈の詞にしたがひ。屋敷に歸り休息いたさん。ナニ方丈。今日はいかい御雜作イヤナニ内記殿。お先へ參る是はしたり。まだふるふてござるかコレ〳〵御内證。ソレ藥でも進ぜられい。アヽ片腕とも思ふ内記殿はアノ臨病最早武藝一通りにおいては。凡日本に立てづく者なき源太左衛門武士たる者はあやかる樣隨分と機嫌を取り。稽古出精召れたがよふござる。ひよつと機嫌の取り樣が惡いと殿であらうが。どなたであらふが。

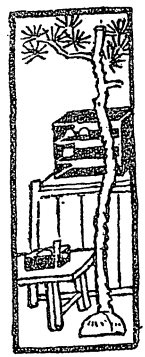
ヤ又どいつでもあらふが。打放して他國いたす。さすれば天照大神が。天の岩戸へ籠つた樣な物で讃岐一國は常闇となり申すムーハ〜〳〵〳〵ハ〜〜〜程に氣を付て勤めさつしやれ。ハ委細承知いたして御座る。此數馬十藏も臆病師匠を破門いたして其許と師弟の契約。すぐにかためのさかづき盃は。御屋敷にて仕らん。然らば一所にドリヤ。お暇申さふか。と飽迄高ぶる高慢我慢門弟引連れて森口は悪口たら〳〵立歸る。無念と思へど詮方も内記が傍にさし寄て。詞是申し。今の悪口聞かしやんしたかお前は悔しうないかいな。と押うごかせど正體もなし。詞なければ方丈制して。詞コレ奥方。内記殿をば客殿へ同道あつて御介抱。坊太郎は乳母おつじ。よきにと計り後云はず。内記が心はかりかれ。いたはる菅の谷方丈も。打連てこそ入相の。花はむかしと散らせて。今は老木の乳母お辻思へば思ひ廻す程。恐ろしや猫奈に盜心の付たるはいかなる天魔の魅入りしぞと顔打守り〳〵暫し涙にくれけるが。詞コレ和子。エーこなたは〳〵〳〵のふ。此乳母は教はせぬに。何時の間に其樣な。さもしい氣になりしやつたぞいの。アノ桃は此寺の名物。殿樣へ御獻上の濟ぬ内は方丈樣はおろかな事。觀音樣へもあげぬげな。いかに禿は是ない迚も。こなたは今年でもふ七ツ。恐ろしい。恥しいといふ事の。ちつとは分ちはないかいの。方丈樣の手前。内記樣御夫婦の思惑。おりや恥かしうて〳〵。コレ顔さへもよふ上げなんだはいの。詞其邪な心から爺御樣の非業の最後。無念とも思はしやらぬ。不孝の罰が身に報ひ。生れも付ぬ不具者。啞となつたに氣がつかぬか。母御は卑しい傾城と素性あらはす今日の仕義。コレ人間と生れては。只一心の置所。賤しうても汚ふても。腹は借物。こなたの爺御は誰あらう民谷源八樣といふ侍の子のする所作がそふいふこなたの心としらず。此乳母が明暮。且那樣の無念の最後。己敵を詮議して。討たさん物と思ふ内。啞と成たるこなたの業病。藥祈禱も利ばこそ。詮方盡て當國の金比羅樣へ立願かけ。病氣と云立本心は金毘羅樣へ火の物斷に食事をたち。果物に生命をつなぐ此乳母が。清き

體を牲に其病ひを治して給はれ。と祈るお辻が誠の心。雅心に訣るなら。どふぞ心を取り直し。詞コレ紙一枚塵一本。人様の物盗む様なさもしい心止て下されヤ。ヤツコレ見やしやれ。こなた故に。此乳母が元の姿はどこへやら假令つゞれは纏ふても心を錦になぜ持つて。爺御の敵討ち負せ名を上げふとは思はずか。と恨みつ泣きつさめ〳〵に五臓を絞る血の涙。息もたへ〳〵斷食に心苦しき其風情。目も當てられずいぢらしが。何思ひけん坊太郎自ら砂をかきならし〳〵。顔と仕方に乳母お辻涙拂ふて。つく〳〵眺め。何書しやる。何じや。エーとつ様が死なしやつたは忘はせぬ。口惜い〳〵。又桃を盗んだはさつきに伯母様へ乳母が話には俺が病む苦になつて。米も粟もくわれず。果物に命をつなぐと云た故ひよつと。われが死ふかと。それが恐しい故。つい桃を取つたのもわれにやらふと思ふた故。もふ是からあんな事はせまい程に勘忍してくれいヤア〳〵〳〵そんなら桃を盗ましやつたは。アノ此乳母にくれふと思ふてかア此乳母に。チーよふ盗んで下さつた〳〵〳〵のふ。チー可愛の子やと引寄せて抱きしめ〳〵詞コレこらへて下され赦してくだされ。そふとはしらず色々に。恥しめたは。エー何事ぞいの。元をいへば盗人の。猿智慧付たもやつぱり此乳母。思へば〳〵これ程に。かしこの智慧を持ち乍ら。何故果報つたないぞ。爺御が此世にござろなら。馬の稼古よ學問よと。座敷の内もお手車。乳母は意匠を着飾つて。一寸出るにも徒士若黨美々しい行列あるべきに。詞小僧よ〳〵と口穢に森口づれが足に迄かゝる憂き目は何事ぞ。現在母御はあり乍ら。三つの年より生別れ。又爺御にも死別れ。よく〳〵親御に縁薄き。こなたがいとしうござる。さくどき立〳〵わつと計に歎きしが。はつと心を取直し。詞エーそれよしない歎きに時移る。乳母の命は權現へさゝげし機牲。此和子が業病を一度本復なさしめて。本望遂げさせ給ひ給へ。南無象頭山金昆羅大權現〳〵一念凝つては髪逆立。眼血走る有様に。坊太郎は只うろ〳〵と背撫さするを見向きもせず。隱してたしなむ寺の刀抜けば稻妻。逆手に取り。ぐ

つと突立引廻はせば驚き逃る坊太郎が顔打まもり打眺め。詞物を云はつしやれぬか〳〵。南無金昆羅大權現〳〵〳〵。アサ物を云はつしやれぬか。南無金昆羅大權現〳〵〳〵。アサ是程に祈誓をかけ。命を斷て願ふてもやつぱり物が云れぬか。扨は金昆羅權現も見放し給ふか。ハアはつと力もお乳の人。あきれて詞もなかりける。詞ヤアお辻。そちが誠心相屆き權現納受あつたるぞ。と一間を出る槌谷内記。菅の谷諸共駈け出て。詞そなたの誠は屆いたぞや。コレ氣を慥かに持ちやいのふ。是のふ是とかゝへを直に。腹帶と心を添ゆる介抱におろか内記は擊勵し。詞ヤア〳〵坊太郎、今こそ赦す暇乞乳母が冥途の餞別に引導せよ。と槌谷が詞、聞くから坊太郎合掌して。詞迷故三界城。悟故十方空。なむあみだ佛〳〵ヤア〳〵〳〵そんなら物が云はれるかいはれるかいのふ。乳母を勘堪してくれとわつと計りに泣出す。詞チヽよふ云ふて下さつたのふ〳〵〳〵ホヽ悦びは。口留なら直仔細といふは五年以前三月十八日。國府八幡造營の節。我も社參と馬場先を。通りかゝりし鳥居前。血に染む死骸。心得ずと改め見れば民谷源八。南無三寶とは思へ共。敵は逃失せたれば是非もなく。若手懸りもあらんかと。提灯の明りにすかし。よく〳〵見れば笄にて。止めをさすが敵の拔け目又坊太郎斯くてあるならば。根を斷つて葉を苅らん。と窺ふ者もあらんか。と此寺へ預け出家となし。詞を制して啞となし。假令いかなる事あるとも。此内記が赦す迄。必ず物を云ふまじ。とおしへし詞守りしめ。そちが最後の今迄も。扨こそ啞となつたるぞ。と始て明す槌谷が本心。適なりける武士なり。詞コリヤ是迄此和子が。啞と見せしはこしらへ事か。そふとは知らず一心に。金昆羅樣へ祈誓をかけ。三七日の斷食艱難辛苦も水の泡。イヤ〳〵。そなたの誠心正しく金昆羅權現納受あつたるしるし。其譯知りし吾々夫婦。坊太郎に敵を討せんと密かに屋敷に招き寄せ。敎へる武藝も遺ぼ子供忘れし事も多かりしに心得ぬは此程から。武藝の覺え智慧才覺。おとなも及ばぬ發明は不思議〳〵と云ひくらし。日數も恰度三七日。詞そんなら私が

此の命。捨てたが功にたちましたかチヽ立つたとも〳〵疑なき證據はまだ〳〵蒙むる夫の靈夢。軍術の聞へある。東國の青柳家へ。坊太郎を送られよと見し正夢を幸に。東の母にも廻り會。コレ此舞のかたしをもつて首尾よふ敵を討つた後。出家得度して。乳母が亡後。亡父の菩提をとへと。吳々も。伯母が詞を守つたる。此稚子の敵討首尾よふ仇を討し後。其名は空仁大德と道得末世に咲匂ふ。花の上野の片邊り。古跡を殘す石碑の響は今に著し。お辻は苦痛も打忘れ。詞エヽ有難や。忝けなや。念願届きし此世の本望只不審なは內記樣日頃に似合はぬ今日の立ち合。チヽ夫こそは。森口が日頃の振舞。源八を討つたる者。正しく彼と我黑星。わざと勝を讓りしは。死だる民谷へ寸志の情。靈夢にまかせ青柳家の奧義を傳ふ夫迄は。足を留めたる我はからい。未練と見せしも搾へ事。ヤア〳〵我腹心の門弟たち數馬十藏急で是へ。はつと答へて庭の面。木影を出る二人の弟子。內記が前に頭を下げ。詞仰に從ひ森口が弟子と成つて胸中を探るくじらの妙藥は靈命を延る藥とも心に付かぬ源太左衛門。先生を忌嫌ふ底意は慥か源八殿を。討たる實否を糺すは我々コレ〳〵〳〵必ず氣をつかれな。と語るこなたへ方丈立出。委細の樣子あれにて聞き。不憫なるは乳母お辻命を捨し心願の空しからざる其證據は。內記殿の正夢に。割符を合す愚僧が夢。すりや貴僧も。そなたにも是は不思議と人々も。あらたなりける權現の。吉瑞を感ずる計りなり。ハア重〳〵の靈夢の告。念願叶ひし此世の思ひ出。心からも晴行く月。西方淨土に赴きて且那に申上るのが此乳母が冥途の土產。ハヤお暇。と腹帶をとかんとする。ヤレ待暫し。と押とゞめ。詞汝が誠届きたる坊太郎が武術の上達。草葉のかげの源八に。未來の土產餞別せん。夫々用意と內記が下知。菅の谷心得。坊太郎に用意の禮り〳〵しくも小大刀構へて待かけたり。十藏數馬は左右に別れ固唾を呑んだる時もあれ。さつと吹くる風につれ。杉の梢にあり〳〵とあらはれ給ふお姿は正しく金毘羅大權現と神ならぬ身の白砂には睨合ふたる晴勝負。ヤア〳〵〳〵。やつと

打合。ハア業ハア足。上からつかふ神力の風にしたがふ小腕の働き。一眠。二足。上段下段。いらつて打込む兩人が竹刀を丁度坊太郎。稀代の手練見る嬉しさ。顏は笑へど胸の中。ハアせぐり來る斷末魔。物云たげにのびあがる。手負の目にはまざ〳〵と拜まれ給ふ梢のかた。詞アレ金毘羅大權現。エヽ有難い。と伏し拜む。心ゆるせばがつくりと嵐に誘ふ乳母ざくら。はかなかりける次第なり。



第四 増補忠臣藏

本藏下邸の段

切　竹本大隅太夫
　　鶴澤道八
琴　野澤勝芳
　　鶴澤綱治

人形

井浪伴左衛門　吉田玉市
三千歳姫　吉田扇太郎
加古川本藏　桐竹政龜
桃井若狹之助　吉田玉幸
小姓　吉田玉丸
奴角内　吉田兵次

假名手本忠臣藏の外傳ともいふ桃井若狹之助と加古川本藏を主に畫かれたる淨瑠璃で殿中で揵谷判官を抱き留めたる加古川本藏はその後うつ〳〵としてゐたが若狹之助のお成りに善美をつくして饗應する、殿中の事から既に御主君よりお手討のところ、實意忠義が通つて本藏は袈裟尺八の身となつて菩堤のために諸國遍歴に出るといふ。

（床本）　加古川下邸の段

てこそ入りにける。人知れぬ思ひこそのみ侘しけれ。我歎きをば我身ぞ知る三世の緣も淺草の、片原町にしつらひし、加古川本藏が下屋敷へ、主人桃井若狹之助、忍びと見えて案内に連れ、直ぐに乘物裏門より、座敷へ舁込むその饗應。或は美つくし善つくし、有らん限りの饗應なり。御用すきにや近習井浪番左衛門家來引連れ邊りを見廻し詞コリヤ〳〵家來共、主人桃井若狹之助樣の妹姫三千歳殿、先達てより本藏が此下屋敷へ差越れ、病氣保養とは表向き、誠は言號の縫之助殿と、遠ざけん爲め御頂け成れし所、今日お迎ひの役目、此番左衛門に仰せ付られ又殿御これへ御成なされたは、詔ひ武士の本藏を、御成敗なされうとの事だ。我豫て三千歳姫に心をかくる所、本藏めが彼是と妨なす、何に付

けても邪魔な奴だ、今日御成敗相濟んだ上、日頃焦るゝ三千歳姫は、身が御供申し、屋敷へ連れ歸へれとある御上意、なんと時節を待たればならぬものだ、ハ～～～大願成就するは今日今夜、併しかれて手剛き本藏ならば、必らず油斷致すな、若手にあまらばコリヤ、かう〳〵と耳に口ム～成程々々、スリヤお姫様の乘物は。オ～サ、花川戸よりお慰みと僞り小舟を出し、向島から野道を横に某が屋敷まで、首尾よく行かばコリヤ、褒美は望み次第。そんなら井涙様。必らずぬかるな。心得ましたコリヤシイ密に〳〵と、眺し合して下部共、小庭へ廻れば番左衛門、壷子の釜の蓋取つて、兼て用意の毒藥を、懐中より取り出し煮立つ釜へそつと入れ、一人笑みする一間より、障子をそつと本藏が、見る共聞く共知らばこそ、仕すましたりと釜の蓋元の如くに直し置き詞ハ～～～本藏が成敗は扨置き、頓て濃茶のもてなし手前、列を並べて皆殺し、ム～ハ～ム～ハ～～～味い〳〵とねじ向く障子びつしやり、ばつと思へどそらさぬ體、誰が糺して水屋の影、忍んで様子立聞く共、かくと白齒も咲花の、桃井若狹之助が妹三千歳姫墓ひこがるゝ縫之助に、別れほど經し物思ひ、目には涙の玉簾、明けて一間を立出て、釜の煮音耳に留め詞アノもずやの煮え音は、松風に似しとやら、古へ須磨へ流罪の行平卿をこがれ墓ひし松風が託ち草、哀に消し憂身とや、ホンに縫之助様と此三千歳が、身にひし〳〵と片時も、思ひ縫ふ夜の新枕、かはす互ひの言の葉も、朝月のまゝきぬ〳〵に、お別れ申して其の後は、爰に月雪花川戸、霞ケ關と引別れ、いつか屋敷へ歸へる雁、文の便も音信も、泣くはかもめか百千鳥、翹あるなら殿様の、お傍へ行きたい〳〵と、人目なければ聲を上げ、かこち給ふぞいたわしき時分はよしと番左衛門、圍をそつと傍に寄り詞申し姫君様、三千歳様と云ふにこなたは涙を隱し詞そなたは番左衛門、いつの間におじやつた。アイヤ只今參つた、イヤナニ姫君様今日は本藏が身の落着、又お前様には今宵屋敷へ連れ歸へれと、則ち此番左衛門お迎ひの役目でござりますム～何と云やる、兄上様が自からに

今宵屋敷へ歸れとかや。イヤモ歸へる共〳〵、きも玉がでんぐり返へる俄の御婚禮、何とお嬉しうござりませうがな。ヤア〳〵そんなら、アノ縫之助様と祝言かや。アヽイヤ、拙者と祝言さゝうとある殿の御上意。エヽ。アヽコレお逃げなさるな、マア〳〵お下にござれ〳〵、これはしたり姫君様、さりとてはつれないと申すもの、ハヽヽハヽヽお前様が戀焦れてござる縫之助殿は、鹽冶判官の弟なれば上への恐れ、御緣組はなんとして〳〵、ならぬ戀路にこがれうより、男に持つて何不足のない此番左衛門、又お前様がお力になさるゝ本藏めは、今日殿様お直の御成敗、なんと御合點がまゐりましたかコレサ〳〵三千歳様、何も其様に管なう遊ばすものではござらぬ。兼好法師はなんと申した、サヽヽヽ、御存じなくば此番左衛門、ツイちよこ〳〵と御傳授いたそと取付く手先を振放し詞主に對して慮外のたはむれ不禮であらうぞ、けがらはしい、下がりや〳〵。ヵツと下つて裾からげる入れかはつてぬつと本藏が、出る共しらぬ戀墓の闇、振の袂を挽臼の、くる〳〵廻り目に餘り、二人が中を加古川と、知らず抱付く番左衛門詞井浪氏、コリヤなんとなさるゝ。ヤア加古川氏か、ムテモ悪い所へ。なにがなんと、イヤサ悪い〳〵〳〵ハヽヽヽヵヽさうだ、悪いお遊びが始つて、何がその、つかまへとか申す鬼の役、拙者に仰せ付けられ、扨々迷惑千萬でござる。ハヽヽヽヽアヽそれは御苦勞でござる、イヤナニ姫君様、かような人非人におかまゐなく、殿のお傍へ、サヽ早く〳〵とすゝめやり、臺子の傍に座をかまへ釜に目を付け、氣を配る、扨てと氣付く番左衛門、本藏が前に詰寄つて詞加古川氏、イヤサ本藏殿、某を人非人だとさみせらるゝ、こなたの非から改めよ、日外鎌倉饗應の砌、金銀のもつて師直に媚諂ひ、御主人に諂ひ武士の悪名付けたは、不忠とや云はん、イヤサ、人非人とや云はん。サヽヽヽヽサレバサ、其落度故に先達てより御目通り叶はず、此下屋敷へ蟄居の本藏、去りながら横戀墓はいたさぬ。ヤなんとまだ申さうか、コレ此釜の湯に、ムヽハヽヽヽ云はぬぞや云はぬぞや、一命は主

へ捧げるが臣の習ひ、御直の成敗少しも厭はん。イヤモずんと恐れ申さぬと行國が、詞に井浪番左衛門、悄氣り入つてそ閉口す、折りから下部が罷り出て 詞 御家老本藏樣を御成敗とあつて、急ぎ本藏に繩打つて奥庭へ引き、太刀取は井浪番左衛門に申付けるとの御諚でござる。と聞くよりはつと驚く加古川、井浪は得手に本藏が、肩衣もぎとり早繩打ち 詞 サア本藏、モウ叶はぬ、御成敗だ〳〵太刀取は此番左衛門、ハレサレ氣の毒千萬、ハ、、、、、、コリヤ何にも狼狽る事はないぞ、どうだ震ひが出たか、オ、尤だ〳〵、が我や最前だんと云つた。一命は主人に捧げるが臣の習ひ、と云つたぞよ、イヤサぬかしたぞよ、サ、とても叶はぬ事と觀念して、早く立つて〳〵きり〳〵立ちおろうと、どうと蹴飛し引張れば、手先しまりて喰ひ入る繩、目には泣かれど心には、これが忠義の仕納めかと、思へば足もたど〳〵と、主人の賢慮はかり兼れ、奥庭へこそ行水の、上へ流る〻ためしなく憂きこと積る行國が、文彌消ゆる間を待つ庭の面、我を仕置の芭蕉葉の廣きも今は恨めしく、人はそれ共白州なる、御前へこそは引かれくる。かくと知らせに若狹之助禦の上に座を設け 詞 イヤナニ本藏、今日の成敗餘の義にあらず、其方家柄と申し勲功にめで、先祖より家老職を勤させ知行五百石をあて行ふ、然るに某さいつころ鎌倉殿中にて、高野師直を只一刀に切捨んと存ぜし所、彼奴低頭平身、イヤモ存外の詫言、コハ心得ずと思ひしが、汝師直が屋敷へ抜け出で、不相應の金銀を以て、媚諂つらひし故、師直は討ちもらしたり、然る所諸大名の取沙汰にも、若狹之助は諂ひ武士、卑法者と殿中一ばいの取沙汰と聞く、其上汝へ遺恨の次第を申聞せし砌、余が目通りで松の一枝を切取りまゞ、此通りと金打致したでないか、そちや某をたばかつたな。ハ、ア恐れながら我君へ申上る。其不可を知つて、諫めざるは不忠の第一、諫れば以て背くに似たり、松ケ枝の金打、何故表裏に仕るべきや、松は常磐木、桃井に背きし片枝、君御短慮の木の扁を切て退くれば、公の一字に恙なく、國家長久祈り奉る。ム、スリヤ松の木扁

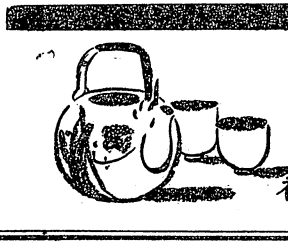
を切取りしは國家の爲、此若狹之助へ諫言の謎となる。ハヽ御賢慮はいかゞでござりませう。ムヽ、然らば請し恥辱はいかに。ハヽア、コハ存じ寄らざる御仰せ、君恥しめらるゝ時は臣死すと申す。默れ本藏左云ふ汝が何故に、なぜ切腹は仕らん、命を惜みのめ〳〵と、蟄居いたせしは何事、それでも武士か、イヤサ家老と云ふか、既に番左衛門申すには、本藏をきつと御成敗なされれば、お家の瑕瑾に相成ると、某へ數度の諫言、是非に及ばず、只今死罪に行ふ、但し異存ばしあるか。ハアヽ恐入つたる御仰せ、不忠不義の本藏、イヤモ何しに異存申上ん、只御憐愍の御仕置、有難く御請申奉る。オヽよき覺悟、併し余を恨むであらうな。コハ勿体なき御詞、下司下郎のなすべき太刀取り、番左衛門に仰せつけられ、死後の面目、去ながら只一言申上たきは臺子の釜と、云ふを打消し番左衛門詞ヤイ〳〵〳〵本藏々々今になつて一言も二言も無いはい、地体迂奴殿樣の御遺恨ある師直を討ちもらし、其上陪臣者のうせる場所でもない大廣間へ出おつて、判官公を抱留め、一つとして碎な事をさらさぬ奴だ、其樣な馬鹿者を生置いては後日の妨だわい、イザ御前やゝ時移れば御歸還の妨、イデ、成敗と裾引上げ、既に討たんと立寄る井浪詞アヽコリヤ番左衛門待て、待て〳〵と云はゞ先づ待て、イヤサせく事はない、すべて大罪人は長く生置き苦しめるも仕置の一つ、いかにしても憎い本藏、余人に討たすも殘念、身が打捨てん、ソレ其刀これへ持てと、優美の顏色、しづ〳〵庭へおり立て詞ムヽ覺悟の体はまだしも出かした。ノウ番左衛門アヽイヤ〳〵左樣ではござるまい、今かくなつてしよ事がなさの覺悟と見えますへヽヽヽコリヤ〳〵本藏本藏、殿を卑怯者になし、大忠臣の某を人非人だの、イヤ、不義者などゝ吐かした、その天罰で今此ざま、ムヽハヽヽヽヽと嘲弄なじる其内に、刀ひらりと若狹之助、今こそ最期觀念と、振上ぐる手を振返し、ずばと切たる井浪が首、水もたまらず打落せば、本藏驚き詞コリヤ番左衛門をお手討アヽイヤ其方とても同罪と、繩目をすつぱと切拂ひ、しづ〳〵座につき

詞を正し若狭之助 詞本藏々々〜。近う参れ、ハ〜ア、其方が科、今日只今相濟んだ。永の暇くれるぞ、スリヤ一命をお助下され、永のお暇さな、ハ〜〜ア難有く存じ奉る。ハ〜〜〜〜嬉しいか、嬉しいは道理道理、コリヤ本藏妻子を都へ登し、由良之助に對面なし、討たれて死にたい心であらうがな、イヤサ隱すに及ばぬ判官を抱留めたは其方があやまり、一命捨れば娘が繻組は扨て置き、判官が位牌へサ言譯立つまい、此若狭之助が爲には身替り同然の判官、スリヤ我命計りか先祖へ對し、忠臣義心とは汝が事、詔ふても苦しうないナニ誣ひ武士は世間にいくらもあるわい、判官が今の有樣後車のいましめ、ふつり短慮止まつたもそちが薩

コリヤ嬉しいぞよ、過分ぞよ、かほどの家來に暇つかはす若狭之助が、心の内を推量せよ、去りながら義を見てせざるは勇なし、此上の賴みを云ふは、三世の緣未來で〳〵忠義をつくしてくれと、後言ひさして顏背け、歎かせ給ふ御有樣、難有し共嬉し共申上べき詞もなく、かゝる智仁の名將の御馬先でも死ぬ事か、僅の義理とあやまりに、命を捨てる不忠不義、何と先非を悔み泣き、御顏見上奉れば、殿も見下し御落涙、袖や袴に兩車軸、流れて外へ小柴垣庭に淵なすばかりなり。本藏手を打ち詞誰ぞお次の衆〳〵、臺子の釜を持來られよ、はつといらへて持ち運べば本藏立つて釜の湯を柄杓に移し鉢植にそゝぎかくれば竹蘭の枯れてし

ぼまる釜中の毒湯 詞先刻番左衛門臺子にかゝり、皆殺しにせんと仕込し毒藥、立聞きしたる本藏が幸ひ、天目奉らざるは右の合仕せ、ハレ御運の强き我君樣と、申上れば若狭之助、猶も忠義を感じける。暫くあつて小姓共、何か樣子は白木の臺、一重ぐりに並べしは、三衣袋に袈裟尺八、餞別とこそ知られけり 詞ナニ本藏、其袈裟尺八は汝へ餞別、一人娘を思ふ親の身は、燒野の雉子夜の鶴巢籠の一曲、又此一品は妹三千歳を預けおいたる止宿の一禮、心を籠し此一書、由良之助が宅へ土産にせよと、手づから給はる御賜。ハ〜コハ難有しと押戴き、開けば高野師直が、屋敷の住居水門下部家侍部屋、樹木泉水居間廣間、委しく留め

る繪圖の面、ハヽハヽハヽヽヽヽ難有し〳〵と、戴き直に懷中し、士に喰付三拜九拜、難有涙に暮にける。若狹之助四方を打詠め詞誠や九枝燈火つきて、只曉を期すとかや、名殘はつきず目出たう門出の盃せん、出立の用意いたせ。ハヽ君には益御機嫌よう。ヤヽそちも無事ではない、首尾よう仕負せ、目出たう〳〵未來で逢はうハヽア二上リウタ馴れし衾の夢を貫く寒山寺詞ム思ひもよらぬアノ唱歌は、妹と三千歳が餘所ながら暇乞と見ゆる、ム幸ひ本藏そちも一曲いたせ、苦しうない赦す。ハヽアウタ送る素足の氷のくさび、朝げの嵐に暮の雪と、浮れしことも、最早迎ひの鶯待つばかり、里の名殘の、柴小船詞本藏近う〳〵。ハヽ、面を上げい、ア我二十五年の春秋を、あしたには教訓の鬱を拂ひ、夕べには講説の星を戴き、晝夜且暮のいつしみ滿足に思ふぞよ、これが此世の見納めなるぞ。ハヽヽヽ。出立致せ。ハヽ。つきぬ名殘と本藏が、涙を隱す編笠の、深き惠みに淺き緣、これのう暫しと三千歳姫、かけ出し給へば若狹之助、袖の枝折戸秋の關、おしかこまれて加古川も、笠の内より御顏を見奉れば姫君も、いさゞ涙に糸竹の、未來は一つ一越斷金、やがて黄鐘鸞鏡は、君に仁なり臣に恩、あるは音律音曲の、榮え榮うる世のためし、筆に傳へて加古川の、武名を永く殘しける。


大阪御池橋
本笠屋
電話新町二大二二番

四ツ橋畔
より

四月の文樂消息日誌

文樂人形淨瑠璃保護に關してはさきごろより公私共に多大の關心を寄せられ絶大の同情を賚り、爰に文樂協會の設立を見る運びにいたりました、大方皆樣へ感謝いたしますと共に益々今後の御聲援を御希ひいたします。

文樂協會設立準備のため左の通り委員會の會合を催されました。

四月四日　午後四時より討議に入り會則の研究、發起人の推選等。

四月十五日

準備委員の方々がお集り種々意見の交換がありました。

四月十八日　午後六時より討議に入り協會設立の準備を着々進められました。

四月廿六日　午後一時より發起人會を開催し、二時より舞臺に人形淨瑠璃を實演し開演中各所に於て太夫三味線人形遣が交々説明をし人形淨瑠璃の本實を實地に徹底させ大方皆樣の御滿足を得ました。

四月十九日

京都帝大御在學中の東伏見伯には東本願寺法主並に裏方御同伴にて御見聞あらせられました。

朗かなつの夏
御宴會はづま

温か・いのじ感
南一温泉料理へ

四ツ橋

お電話の用は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

のまさなみ
南一温泉料理

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南 七四〇八番
三七八八番

・設備斷然東洋第一！

アイス・スケート場

A（大）リンク 二百坪
B（小）リンク 百坪

特に初心のお方を歡迎いたします

初夏風薰る!!
絶好の行樂!!

點焦の觸感近代する廻旋を上盤玻璃

毎日 午前十時 至午後十一時
日曜、祭日に限り午前九時より
・一般外來入口 北側電車通り
・御觀劇の方は場面の時間を利用して御自由にお出入りして戴けます。

大阪 歌舞伎座 アイス スケート場

・結氷狀態は最も良好

歌舞伎座

五月五日初日

・東西合同大歌舞伎・・・

（ヒルの部）
岩倉具親 ひらかな盛衰記
明 涙の四辻
烏

（ヨルの部）
頼朝の死 三社祭
關取千兩幟
尚 唐人お吉
武 刀

中座

廿九日初日
・松竹家庭劇・
煙にまかれた話
竹の子
お蝶夫人
街の人氣者
手

浪花座

廿九日初日
・扇雀・小太夫合同劇・
盧原多助
大森彦七
次郎長裸道中

角座

一日初日
・東西落語家芝居・
國定忠治
太 沼津
十 源平魁躍

松竹座

廿七日初日
ルネ・クレイル氏一年一度の名畫
巴里祭
エドモンド・ロウ氏主演
ウイン・ギブスン嬢主演
爆笑する悪魔
切封
近滿蒙龍騎隊
心の宵空
封夜毎來る女
切武器よさらば

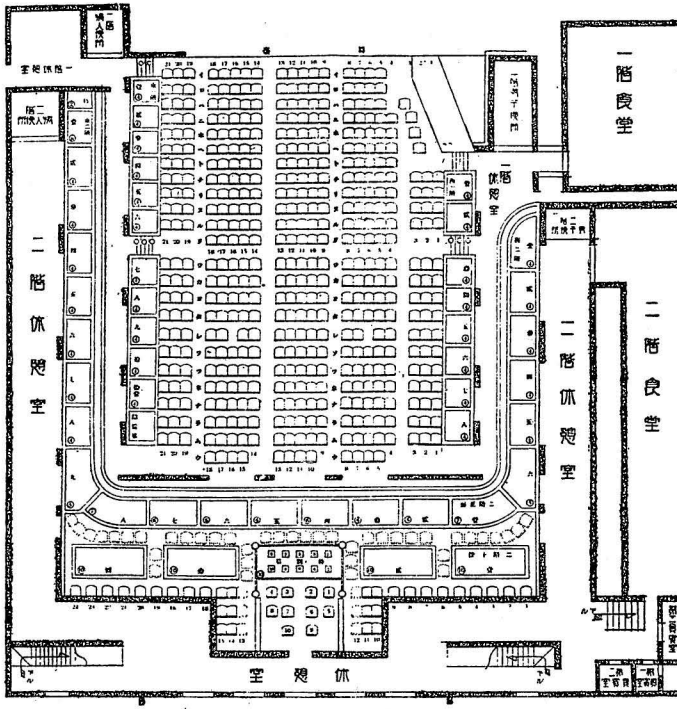
朝日座

廿九日初日
切封
川崎弘子主演
忘られぬ花
林長二郎主演
俠客春雨傘
切封
近晴
日十泣き濡れた春の女よ
封九の春往來
白鷺
鼻唄仁義
疊

辨天座

廿九日初日
切封
阪東妻三郎主演
江戸城心中後篇
靜子主演
仇なさけ
近感激の人生
日間貫一
封瀧の白糸
切復讐鬼

文樂座御席場御案内



御、觀、覽、料、の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にされます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

文樂座人形淨瑠璃

五月興行畫の部は

午後一時開幕

薫樹累物語

埴生村より土橋まで

錣太夫（新左衛門）他若手連の掛合

岸姫松轡鑑

飯原兵衛屋敷の段

古靱太夫（友次郎）の熱演の至藝

戻駕色相肩

廓噺の段

若手新進の力演になる絢爛

畫の部料金

椅子一等 二、〇〇　二等 〇、八〇　三等 〇、四〇

昭和八年四月廿日印刷
昭和八年五月一日發行
發行人 大塚真三
大阪・四ツ橋文樂座
編輯 成山桂三
印刷者 永井太三郎
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目

碁太平記白石噺

本朝廿四孝

金比羅御利生花上野譽碑

增補忠臣蔵